

十九年四月、二十年八月 ウエワク（金山ババラム、クソイヤム）

ダムヒール遭難

サラワケット転進（長距離、食糧不足、約四十日の機動）「八一号作戦」（ガリ転進、長距離、食糧不足、約五十日の機動）

十九年九月 食糧断絶期 以後栄養失調マラリア右のほか、空襲及マラリアによる損害は地域及時間の如何を問わず全期にわたり不断に多発せり。

このような状況は同師団歩兵团司令部の隷下部隊たる

歩兵第六十六連隊（宇都宮編成）

歩兵第一〇二連隊（水戸編成）

歩兵第一一五連隊（高崎編成）

は十七年三月、十八年二月、八一号作戦によりラ

エ前進の途中ダムヒール海峡において遭難（海没）大部戦死す。ダムヒールの悲劇と称されている。

野砲兵第十四連隊も、ダムヒール海峡において大部戦死す。

工兵第五十一連隊もダムヒール海峡において遭難。

第五十一師団通信隊、輜重兵第五十一連隊、

師団兵器勤務隊、第一野戦病院、第二野戦病院、

第三野戦病院、第四野戦病院、他も、同師団司

令部、歩兵团司令部同様の苦難の行動と多数の戦没者を出したのである。

右は、地上部隊の一例として、基兵团の部隊概要をもつて参考とされたい。

海軍キスカ島防空隊

志願兵から帰還まで

石川 伊藤 和夫

大正十五（一九二六）年五月二十六日、石川県現松任市宮永町の農家に生まれ、高等小学校を出ました。

当時、役場には「満蒙開拓義勇軍」「陸軍士官学校・幼年学校」「少年航空兵志願」などの貼紙などがありました。家では農家の跡取りだから、農学校へ進学させたかったようですが、私は松任農学校の試験と海軍の志願をし、両方共に合格しました。

父は長男（兄）が三歳で死んでしまったから、農学校へやりたかったのでしょうか。昭和十七（一九四二）年、戦争が始まり、所謂、国家の非常時でもあり、また、報道では「日本軍連勝」で湧きあがっていました。

私が、海軍を志願をしたので、父は内心固まったのではないのでしょうか。海軍志願の試験は、役場まで海軍の人事部の人が来て、身体検査と学科試験がありました。その時、満蒙開拓青少年義勇兵に志願した友人も三、四人おりました。

私は、このような時節であり、どうせ、兵隊に行かねばならぬのだから早く志願をして軍人になろうという気持ちもあり、農学校より海軍を志願したのであります。父も、私の気持ちや、当時の世相というか、適

齢期になれば兵隊へ行かねばならぬのだからと、ある諦めの気持ちもあり、私の希望を許したのでしょう（志願には親の承諾が必要でした）。

実のところ、長男が早逝したというのを知らず、検査の時も「長男です」と言ったら、試験官は「お前は次男坊だ、お前は一銭五厘の葉書（当時の葉書の値段は一銭五厘＝一銭は一円の百分の一、五厘は一銭の二分の一）一枚で来ているのだから」と言われました。その時、昭和十七年の志願兵は長男は無く、全部次男坊以下でありました。先に申したように、長男が三歳の時、肺炎で死んだと言うことを全然知らなかったの、驚いた次第です。

当時の自分の気持ちでは、兵隊に行くのは「滅私（死）奉公」が目的だと心に決めておりました。戦争中のことですから、周囲の人々は皆そんな気持ちで、死は恐ろしくなかった。死ぬのは当たり前と思っていました。

そのため、学校在学当時から、水泳や運動で体を鍛

えていました。連合運動会では選手であったし、水泳の選手でもありました(当時松任には、地方では珍しい五〇メートル公認のプールがあったのです)。そのように、精神的には覚悟をし、体も鍛えていました。

我々の海軍の管区は舞鶴で、区内は山形・新潟・富山・石川・福井・滋賀・京都でしたから、海兵団は舞鶴であります。入団は、昭和十七年五月一日、松任出発は四月三十日で、数人の者が入団するので、海軍の人事部の方から引率者(下士官)が来ました。その時から、もう気合をかけられましたし、入団の晩から臂を叩かれました。その棒には「軍人精神注入棒」と書かれ、檜の棒でバツタと言うのでした。

入団してから、一五センチ平射砲を射つ練習(空砲砲は八門)がありました。ある新兵が放屁をしたら、一個班十六人が、灣に入って泳いで「丸を拾って来い」と言われ、約二時間泳がされました。班長はキャター(ボート)に乗っている。放屁のガスが水の中に有るわけが無いのだから拾えるはずがない。「何でこんなことをするのか」と思ったのですが、これが、海

軍の教育だと思いました。

八月十五日、新兵教育は終わり、舞鶴の実施部隊に入りました。湾口の手前の砲台に派遣されました。これから、軍人としての、三等水兵としての任務が始まるのでした。海兵団では四等水兵で、腕にマーク無しでしたが、ここで、初めて錨のマークが付きました。帽子に「大日本海軍……」と印されています。これが、水兵としてのスタートでありました。

教育が厳しくて、脱走したり、自殺した連中もありましたが、教育班は十六人、一個班に一人、二等兵曹か三等兵曹がいるが、この人たちは、学校から帰って来たばかりの張り切った若い連中です。

昭和十八年五月一日、千葉県館山の砲術学校で三か月間、厳しい教育を受けました(館山砲術学校は厳しいので有名)。私は、陸上対空班で習ったのは一二センチ高角砲と二五ミリ機銃、一三ミリ機銃と、陸軍の軽機関銃でした。

卒業をすると左腕にマークを付ける。砲身に桜の

マークを付けたのを左腕に着けるので、これで学校を出たということが分かるのです。卒業と同時に千島の第五十一根拠地隊司令部付となり、シムシユ島勤務でした。司令官は新葉中将です。北千島は寒いのです。

大湊から「新帝丸」という五〇〇〇トンの船で千島列島の最北シムシユ島で、ソ連領カムチャッカと接するのですから、島からロシアの兵隊が見えるのです。

米軍から何回もの空襲があり、P51のカーチスホーク、ロッキードなどからの銃撃が多かったです。シムシユには一二センチ、七センチ高角砲があり、砲身が二本並んでいました。これで敵機を射ちました。陣地には掩蓋があり横には深い通路が掘ってあります。

空襲警報が鳴ると「配置に付け！」で塹壕を歩いて砲の位置に付く。一門に八人、班長は棒を持って鉄帽の上から叩く。空襲では、飛行機雲ができる程高い所から爆弾を落とす。ヒューッという音がして落ちてく

る。戦死した者、負傷した者もいました。

その後、呂号潜水艦に乗って二週間、アッツ島からキスカ島へ米運びです。ご承知のようにアリューシャン列島の中の日本軍が占領した島です。アッツ島には山崎保代大佐以下の陸軍部隊が上陸（後、昭和十八年五月二十九日玉砕）していました。キスカ島には海軍部隊が占領していましたが、何しろ、米軍の空襲も盛んで、食料も自給できないのです。

呂号潜水艦は中型の潜水艦ですし、アリューシャン諸島に対しては米軍が再上陸したりし、アッツ、キスカへの爆撃は猛しかったのですから命がけの輸送でした。隠密行動ですから艦内生活も厳しく、大変危険な不安な日々ですから、この勤務の二週間は長く感じましたし、ひどかったから早く終わればいいなと思っ

ていました。

また、海軍占領のキスカ島の第三十二防空隊に編入され、五〇センチの探照燈の操作の訓練です。航空機に何燈かで照らすと、操縦士の目が眩んで墜落する

のです。昼間は探照燈のレンズ磨きでした。

次には、米軍の上陸に備え、戦車を攻撃するのですから、爆雷とか、棒地雷を背中に載せて、戦車の下に跳び込む訓練です。戦車に対する特攻自爆です。一個小隊、三十数人、我々は二等水兵ですから、どこへ行っても一番下の新兵、下がないのです。下が入らなければ万年新兵ですが、その反面、海軍の給与は最高でした。それでも毎日、毎晩のバツタに変わりなく苦勞の連続でありました。

キスカでの勤務は一年程度で、その間良かったのは給与だけで、毎日が初年兵としてクルクル回りで、座っている暇がありませんでした。その代わり、その間に戦友間のつながりは強くなりました。

戦闘訓練は生やさしいものでなく、いつ米軍が上陸するかわからない、空襲は度々あるのです。従って、空襲に対する射撃と、敵上陸に対する戦車攻撃の訓練、先に申しました戦車に対しては肉弾をもって防ぐのですから、皆と話をしたのですが「爆弾三勇士」だと言って覚悟を決めておりました。

従って、キスカにいた時は不安はありませんでした。精神的に教育されたのは「死ぬのは当たり前」と思っていたので、こわくもありませんでした。戦友たちも死を覚悟していたから、愚痴を言う人は一人もありませんでした。だから、後から来た三十歳位の補充兵の人は可哀想でした。妻も子供もいるのだから可哀想でした。我々は若いし、志願をして入ったのですから死ぬのは当然と思っていたからです。

志願兵には五月と九月とあり、一年のうち前期と後期とあり、その間は四カ月違いですが、新旧の差はありませんでした。結果的には恩給上もいろいろあったのです。

キスカ島も、アッツ島は離れているから、潜水艦で三、四時間がかかります。米は陸軍のアッツ島から、海軍のキスカ島へ送った。従って、アッツ島の玉碎は、我々がキスカに米を運んで一週間後に、「アッツ玉碎」の電報があったのです。

その時には、「我々も日本へは帰れない。これで終わりだ、覚悟を決めて一層頑張ろう」と、勤務をして

いました。

その頃は、空襲はますます激しくなってきました。我々は、全員退避前に駆逐艦によって大湊防衛隊に転属になりました。従って、最後の撤退の時は青森県にいたのです。あの時のことを思うと、海軍の団結は強かったです。

大湊では進級して上等水兵になったので、初年兵当時より幾分楽になりました。それからは、バットで叩かれなくなりました。あの痛いバットは教育の手段であつたわけです。それだから、これからは、バットを振る立場になつたのでした。

石川県の人間の一般は、バットを振る者が多かつたのですが、私は、下の者に対しバットを振らず、言つて聞かせるようにしたので、「石川県の人でも、優しい人もいる」と、下の者から言われました。

昭和二十年八月、終戦となつた時は、大湊でしたが、私が若い志願兵だつたためか、「保安隊に残れ」と言われ、一年間残り、昭和二十一年八月に故郷に帰

りました。

その間、家の方では、戦死したと言われていたもので、家ではビックリして一騒ぎになりました。自分は家へ二年半の間、音信不通だつたからです。特に「戦死の公報」は来なかつたのですが、ラジオでは死んだと放送されていたそうです。家では「本当に死んだか」と不安な日々であつたようでありました。

志願して入隊し、戦闘にも参加、帰国したのですが、その間良い経験をしました。軍隊とは、戦争とは、こういうものだど知り、そして、普通の人の行かれぬ所まで行つて来たからです。

私の乗り組んだことのある輸送船「日新丸」は、その後、カニ工船として運搬しているのを見て感慨無量でありました。

帰ってからの生活は、家業の農業をしました。三男の弟は、明大に行き卒業して大和に勤めました。私は家業の農業を継ぎ、今は、子供に継がせて、のんびりやりながら、消防団を十年間もやり、今は恩給欠格者の戦後処理の仕事を最後までやろうと思つています。

【解説】

キスカ島は、アッツ島と並び知られるアリユーション列島、北方の海軍、第五十一根拠地隊司令部の隷下、第三十二防空隊―第五十一防備隊が守った孤島である。

昭和十七年五月五日

大本営、連合艦隊にミッドウエーとアリユーション西部要地攻略を発令、ミッドウエー・アッツ・キスカ島攻略日を六月七日と決定。同十二日、連合艦隊、MI作戦（ミッドウエー攻略）とAL作戦（アリユーション作戦）命令。

同年六月十三日、大本営海軍部、アッツ島・キスカ島の長期確保地を決定。

同月二十三日、大本営、連合艦隊にアリユーション群島作戦に関する陸海軍中央協定改正指示。

七月一日 北方部隊、アリユーション防備隊編成発令。同年九月十八日 米軍機、キスカ島空襲。

十月十日 キスカ島七回にわたり空襲を受け、水上艦艇の在泊困難となり、防備強化急務となる。

同月十七日 キスカ島に対する米軍の空襲激化し、

軍需品の損耗激増、我が弾薬輸送の駆逐艦減耗。

同月二十日 大本営、北方軍のアッツ島の再占領発

令。キスカ島に対する敵空襲激化のため地上部隊

は地下施設工事に移行。

十一月十日 北海守備隊司令官キスカ島に上陸。

十二月二十六日 海軍水上戦闘機六機キスカ島に進

出。アッツ・キスカ島への船団輸送護衛開始。

同月下旬 米軍、キスカ・アッツ島の奪回に充当部

隊を選抜。

昭和十八年一月六日 アッツ・キスカに向かった輸

送船各一隻を撃沈される。

四月十八日 北海守備第二区長、山崎保代大佐アツ

ツ到着（山本連合艦隊司令長官戦死）。

五月十二日 米軍アッツ島に上陸。

同月二十七日 潜水艦によるキスカ島撤収作業開始

（六月二十二日、第一期）

同月二十九日 アッツ島守備隊（山崎保代大佐以下

約二、五〇〇人）玉砕。

六月二十三日 北方部隊指揮官、潜水艦によるキスカ守備隊撤収中止下令。(五月二十七日からの収容人員、陸海軍約八八〇人)

同月二十四日 北方部隊指揮官、水上艇によるキスカ守備隊の一挙撤退を下令。

七月二十二日 キスカ島撤収作戦の艦隊、幌筵港出撃(第二次)。

同月二十九日 キスカ島撤収作戦部隊の第一水雷戦隊司令官木村昌福少将指揮の水雷部隊、キスカ湾に入泊し、在島海軍全員(約五、二〇〇人)収容成功。

八月一日 キスカ撤収、第一輸送隊第二警戒隊、幌筵島帰着(完全撤収無事終了)

第三十二防空隊 十八年二月十二日～八月五日(鳴神島)、八月五日解隊し第五十一警備隊。

第五十一警備隊 十八年八月五日～二十年六月占守島、六月二十一日～七月十日内地(海軍加算調書)。